

氏名 林 淳子

本論文は現代日本語の疑問文について、文の内容的な側面と相手に行動を促すなどの言語行為的な側面の双方から分析を行ったものである。全体は11章から構成されている。

序章では、現代日本語において、疑問文の規定が容易でないことを指摘し、疑問文を疑問文らしく見せる文法形式として助詞「カ」「ノ」動詞シヨウ形などがあることを論ずる。

第1章では、従来の日本語疑問文・疑問表現の研究史を概観し、日本語疑問文に含まれる「問い」の概念の精密化が必要であることを主張し、本論文の立場を示す。

第2章では、現代日本語疑問文にあっては、言語的反応の引き出し方に3種の区別があり、また、引き出す言語的反応そのものには、4種の区別があるとする。

第3章では、第2章で示した疑問文のそれぞれの種類において、文末に助詞「ネ」や「ナ」の付加によって、表現機能に変化が起こることを述べる。

第4章では、文末に助詞「ノ」が付加される疑問文を取り上げ、判定要求疑問文（「もう起きたの？」など）には、事実と了解内容の結合の承認を留保する構造があるとする。

第5章では、文末に「ノ」が付加されない疑問文を取り上げて、それが共感の表明、行為の発案などを示す場合に用いられることを述べる。

第6章では、「何」「いつ」などが用いられる疑問文（不明項特定要求疑問文）において、通常は文末に「ノ」の有無で文意の相違は生じないものの、使用場面によっては、「ノ」の有無に一定の傾向が生ずるとする。

第7章では、「シヨウカ」の類の疑問文と「スルカ」の類の疑問文では表現領域が異なり、前者では内的感覚の発露、後者では相手の存在を意識した質問文になるとする。

第8章では「シヨウカ」「スルカ」の類の疑問表現がいつから用いられるかを平安時代以後の会話文について検討し、現代語と同じ用法は近世後期の江戸語から見られるとする。

第9章では、日本語の小説とその英訳を比較し、相手の意向を引き出すタイプの一人称主語疑問文が英訳では多く平叙文や二人称主語の疑問文に翻訳されることから、この類型が日本語に特徴的であると見られると主張する。

終章では本論文が従来の研究に比して「問い」の概念を詳細に検討し、文型の整理に成功したことを主張する。

本論文は、現代日本語の疑問文とその含意について精密に分析し、新しい疑問文研究の展望を拓いたものである。否定疑問文などを扱っていないなどの面はあるものの、本論文は日本語疑問文の研究を大きく進めたものとして高く評価できる。この理由から、本審査委員会は全員一致で本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。